第　39　号

県中教研
国語部会だより

発 行 日　令和6年3月
発 行 所　富山市千歳町1－5－1
富山県中学校教育研究会
編集責任者　能瀬　　明
題　　字　金山　泰仁　先生

一人一人の学びを支える

指導主事　米田　　歩

今年度、たくさんの授業を参観させていただきました。その中で、印象的な生徒の姿に何度も出会うことができました。古典の朗読の工夫について考える授業では、先生の助言や友達との交流を機に、とても納得した様子でワークシートに書き込みを始めた生徒がいました。そこには登場人物の心情を多面的に捉え、表現の工夫に結び付ける記述が書き込まれていました。その生徒の表情は、何か楽しそうでわくわくしているように感じられました。自分の学びが深まったと感じたとき、生徒はこのような顔になるのだと実感しました。

このように、言語活動に意欲的に取り組み、ペアや小グループを取り入れた学び合いを通して考えを深める生徒の姿を多く見ることができました。

これは、先生方が、研究主題の副題「言葉に対する自覚を高める言語活動の工夫」の趣旨に沿って、生徒の実態に応じて言語活動を工夫し、授業を工夫してこられた成果であると考えます。

国語科では言語活動を通して資質・能力を身に付けます。しかし、生徒は言語活動を活発に行うことで「国語の勉強を頑張った」と思ってしまいがちです。どんな力が身に付いたのかという自覚は曖昧かもしれません。これからの国語科の授業を思い描いたとき、ゴールに向かって、一人一人が、時に立ち止まりながらもそれぞれの歩みでぐいぐい進んでいく姿をイメージします。そのためには、生徒自身が、単元の目標を理解していることや、自分の学びを自覚すること、そして自分の学び方を自分で調整できることが必要だと考えます。その推進力となるのが「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善です。

前述の生徒のように、すべての生徒がわくわくした表情で授業に臨めるように、授業改善に向けて焦点化した研修が進められることを期待します。

（東部教育事務所）

主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

部長　能瀬　　明

今年度も昨年度に引き続き「言葉による見方・考え方を働かせ、思考・判断・表現する言語活動を通して、国語の資質・能力を育成するための指導はどうあればよいか。－言葉に対する自覚を高める言語活動の工夫－」を研究主題として研究を進めてきました。

第67回研究大会では、各地区で工夫を凝らした実践が提案され、多くの成果を得ることができました。高岡地区では、論理の展開の過程に着目しながら文章のもつ説得力や効果について考えを深める授業が行われ、砺波地区では、討論によってテーマに関する考えを深め合う授業が行われました。「ワールドカフェ方式」と呼ばれる話合いの方法や、対話の録音を用いた話合いの方法等が提案され、それによって主体的に対話する生徒の姿が見られました。また富山・新川地区では古典作品を題材とした授業が行われました。登場人物の心情やエピソードに着目したり、朗読のための台本を作成したりする活動を通して、人物像や置かれた状況、表現の効果等について考えを深める授業が提案されました。授業後の協議においては、ねらいと言語活動のつながり等について、先生方による建設的で前向きな議論が行われました。

また、富山、高岡の２地区では、授業力向上アドバイザーとして、富山大学名誉教授・奈良教育大学特任准教授の米田猛様をお迎えし、「読むこと指導の言語活動再考―ノート指導の見直し―」と題したご講話を頂きました。「考えをまとめたり、生み出したりする『思考の運動場』」としてのノート指導の在り方について、具体的で貴重な示唆を頂きました。

今後も「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を継続し、国語科としての資質・能力の育成を目指した実践を積み上げていきたいと考えています。

（富・三成中）

第 67 回　研 究

新　川　地　区　（魚・西部中）

（1）研究授業

金山那穂教諭が第１学年で「蓬莱の玉の枝―『竹取物語』から」（光村図書１年）を題材に、「『竹取物語』の魅力を語り合おう」という単元の授業を提案した。

本時のねらいは、昇天の場面を現代語訳で読み、読み取ったかぐや姫の心情を手掛かりに、どのような人物として描かれているかを考えることであった。生徒は、これまでに物語や詩等の文学的文章の学習で、叙述を根拠に自分が読み取ったことを整理する三角ロジックを意識してきたこともあり、根拠を明確にして、積極的に話合い活動に取り組むことができていた。また、授業の展開を示したパワーポイントや、本時の目標が達成されるように工夫されたワークシートも、生徒の活動意欲を引き立てることに有効であった。

（2）研究協議

グループ別協議では、「話合いを深めるための工夫」や「語彙力が少ない生徒にどこまで支援をするか」、「どのような授業形態がより効果的か」などの視点から意見が出された。

（3）研究協議（指導助言）

小櫻昌子指導主事（東部教育事務所）からは、研究授業について、「単元の目標を達成するために指導する内容を焦点化したことが効果的であった。一方で、振り返りにおいては、生徒が本時で得た学びを自覚できるよう、視点を明確にする工夫をすることが大切である。また、目的を大切にして話合い活動を設定する必要がある。」などの指導助言をいただいた。

佐藤　玲未（中・雄山中）

富　山　地　区　（富・新庄中）

（1）研究授業

加納麻未教諭が第１学年で「『竹取物語』五人の貴公子のおもしろさを伝え合おう」という単元の授業を提案した。五人の貴公子の中から選んだ好きな貴公子の「『推し』エピソード」のおもしろさについて話し合う授業であった。導入時のICTの活用によって、生徒が授業に参加しやすく盛り上がる空気がつくられていた。また、教科書の内容以外の豊富な資料が、エピソード選択に当たり生徒の選択肢を広げ、効果的であった。

杉田遥教諭は、第２学年で「『扇の的』を朗読し、『平家物語』の世界に親しもう」という単元の授業を提案した。「扇の的」の情景や心情が伝わるように朗読の台本を見直す授業であった。朗読の仕方を考えたり見直したりすることで、生徒は、改めて人物の心情や状況、表現技法による効果について考えることができていた。また、実践しながら工夫箇所を決めていく過程が、生徒の達成感へとつながっていた。

（2）指導助言

中川伊通子指導主事（東部教育事務所）からは、単元構想や主体的・対話的な言語活動の工夫、見通しをもった学びと振り返りについて助言をいただいた。

また、米田歩指導主事（東部教育事務所）からは、言語活動を通して資質・能力を育成するということ、単元の目標に向かって授業を行うこと、生徒の興味を古典への親しみにつなげることについて助言をいただいた。

古木　陽子（富・山室中）

大会を終えて

高　岡　地　区　（氷・北部中）

（1）研究授業

米田香麗教諭による「モアイは語る―地球の未来―」では、「筆者の論理の展開には、どのような『効果』や『説得力』があるのか考えよう」という学習課題を設定し、ワールド・カフェ方式を取り入れた話合い活動を行った。

授業では「読者に分かりやすい内容になっている。」と発言した生徒に対して「分かりやすい内容とはどんなことなのか。」と重ねて質問するなど、言葉の使い方を吟味しながら、表現を読み解いていった。生徒は、使われている表現一つ一つについて考え、「なぜこの言葉を使っているのか。」「他の言葉ではだめなのか。」と話し合っていた。

途中で班員を交代し、ホスト役の生徒が新しく班に加わった生徒に自分たちが話し合ったことを説明した。他の班がどのような話合いを行い、発見をしていたのかを知り、新しい視点から文章を捉え直すことができていた。

（2）研究協議（指導助言）

グループ協議では、「筆者の作戦」と「効果・説得力」の違いが話題に上がった。言葉の定義をはっきりさせた上で話し合わせれば、さらに考えが深まったのではないかなどの意見が出された。

上田智代子主任指導主事（西部教育事務所）からは、「話合いの前に吟味のポイントを確認したこと」、「ホスト役がうまく説明するために、発表内容を確認する時間が設定されたこと」を評価していただいた。ワールド・カフェをそのまま取り入れるのではなく、付けたい力を明確にして役割を絞ったことで効果的になったが、ワールド・カフェのようなビジネスの現場から生まれたものを学習活動に取り入れるにはまだまだ検討の余地があり、研究を重ねていくよう助言していただいた。

山崎　佳子（射・大門中）

砺　波　地　区　（南・城端中）

（1）研究授業

金岡恵子教諭が第２学年で「立場を尊重して話し合おう『討論で多角的に検討する』」という単元の授業を提案した。話合いの場面を録音し、それをグループで聞いた。自分たちの活動を振り返ることで、生徒一人一人に新たな気付きが生まれた。教材会社制作の話合いの動画ではなく、自分たちが実際に行った話合いを振り返ることで、生徒たちは自分事として捉え関心をもって真剣に聞き、考えることができていたと思われる。また、授業の最初に話合いのポイントとなる視点を明示したことで、生徒は学習の見通しをもって活動できていた。さらに工夫できた点として、話合いの目的をより明確化することが挙げられる。「相手の立場や考えを踏まえる」という視点をより具体的に明らかにする方法について話し合ったり、視点を明示せずに話合いの展開から生徒たちに見付けさせる活動を行ってみたりすることも有効であると思われる。

（2）研究協議（指導助言）

下村知絵指導主事（西部教育事務所）からは、「言葉による見方･考え方を働かせる言語活動の工夫」と「主体的な活動にするための課題設定の工夫」について指導助言をいただいた。本時においては、

・討論そのものを目的にすることなく、討論を通して話合いの方法を学ぶ生徒たちの姿がみられた。

・話合いの内容に着目させるために、音声だけ記録することは有効であった。

・生徒が、討論のテーマを設定したり選択したりできるとよい。発達段階に応じて、日常生活だけでなく、社会生活からテーマを設定する必要がある。などの助言をいただいた。

八下田道子（小・蟹谷中）

中新川郡中教研

「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた言語活動の工夫」

今年度は、「生徒が学習に見通しをもったり学びを振り返ったりする場面を設定する工夫」をテーマに、各校の実践事例を持ち寄り、情報交換を行った。

雄山中学校で活用している振り返りシートは、各学期のはじめと終わりに「取組内容」、「学習内容」、「テストへの取組」について段階的に自己評価することになっている。また、各単元で「学習課題への取組」として、努力したことやできるようになったこと、気付いたことを自分の言葉で書けるようになっている。

このシートを活用する実践について、成果と課題を明らかにし、今後さらに生かしていくための方策について考えた。成果としては、生徒が自分の学びの変容を実感できたことが明らかになった。課題としては、各単元を振り返る視点が個々の取組についてなのか、学習内容についてなのかが明確になっていないこと等が挙げられた。振り返りの視点を明確にし、学びの成果や変容を自覚できる振り返りシートにすること、そして次の学びにつなげることができるように研究していきたい。

佐藤　玲未（中・雄山中）

富山市中教研

「ICT機器の効果的な活用法の工夫と国語の資質・能力の向上に結びつく言語活動の在り方」

今年度、富山市国語部会では、ICT機器の効果的な活用法の工夫と、国語の資質・能力の向上に結びつく言語活動の在り方について考えるべく、研修を重ねてきた。

６月部会では、芝園中学校の村﨑凌也教諭が「魅力的な提案をしよう（光村図書２年）」において「新婚旅行プランの企画会議をしよう」という学習課題で研究授業を提案した。また、奥田中学校の杉本可奈絵教諭は、学校に設立される新施設について提案するという設定で「交流を通して、よい根拠とは何か考えよう」という学習課題を掲げ、研究授業を提案した。

８月部会では、上滝中学校の恒田浩史教頭を講師に迎え、実践例から学んだり、生徒になりきって、部員全員が学習端末を操作しながら課題に取り組んだりすることで、ICT機器の具体的な活用について学ぶ有意義な機会となった。

今後も引き続き、ICT機器の効果的な活用について追究していきたいが、一方で、実際に手を動かして書くこと等、これからも国語科として大切にしていきたいこととのバランス等についても課題と捉えており、考えていきたいところである。

古木　陽子（富・山室中）

射水市中教研

「教員も学び合う授業を目指して」

市内国語部会員に若手の教員が増えたことで、どのような授業を展開すれば生徒の意欲を高めることができるかという悩みに答え、新湊中学校の門島佳伸教諭が、自作教材「キツネとカモ」を用いて研究授業を行った。

「キツネとカモ」は視点の異なる短い文章を読み比べて、どのような情景が描かれているかを考える自作教材である。助詞の使い方によって、描かれた情景が大きく変わると気が付いた生徒は、書かれていることを注意深く読み進めていった。周囲と相談する時間が設けられると、生徒は文の言葉を根拠に示しながら、互いが読んだ情景を説明し合った。読んだ情景が異なっていた場合には、その理由を説明し合うなど学び合う姿が見られた。言葉一つ一つを吟味しながら読み解いていく度に、生徒の興味・関心は高まっていった。

若手教員からは、言葉にこだわるための発問の仕方などをベテラン教員から学ぶことができ、大変有意義な研修であったとの声が聞かれた。今後もさらに教員が学び合える研修を企画していきたい。

山崎　佳子（射・大門中）

砺波市中教研

「説得力のある構成を考えよう　スピーチで社会に思いを届ける」

５月に、庄西中学校の松井祥太郎教諭が研究授業を行った。自分の意見に説得力をもたせるために、「構成を工夫する」という視点にしぼって活動を行った。アドバイスの基準を基に、グループごとにスピーチメモを見せ合い、構成についてアドバイスする内容をふせんに書き、やりとりを行った。

グループ活動では意欲的にアドバイスし合う姿がみられた。また、学習端末と紙媒体の活用のバランスが最適な授業づくりの提案として、タブレットを用いた資料作成と、ふせんによる構成メモ作成を行った。ふせんを貼るワークシートは、改善の前後で思考の過程が可視化され、生徒が見直しやすいよう工夫されていた。

課題として、「興味を引くため」「聞き手に応じた提案」「自分の思いを素直な言葉で」という基準で深く考察すべき活動が、生徒によって視点にずれが生じていたことが挙げられた。生徒同士のアドバイスの視点が指導事項に沿ったものになっているか、適宜確認していくことが必要であると考える。

今回の授業では、最上級生という発達段階に応じた社会問題に、様々な角度から目を向ける生徒たちの姿がみられた。生徒の将来を見据えた授業者の思いが、活動の意欲につながっていた授業展開であった。

八下田道子（小・蟹谷中）